アブストラル®使用の手引き

医療法人　東札幌病院　薬剤課

目次

1、 突出痛治療の評価アルゴリズム

2、 アブストラル®使用のためのチェックシート

3、 アブストラル®を使用するための当院のルール

（1） 弱オピオイド定期投与時

（2） １回処方量

（3） １回用量と追加投与量

（4） 増量時の判断

（5） 他のレスキュー薬投与の必要性

4、 処方・指示簿入力方法

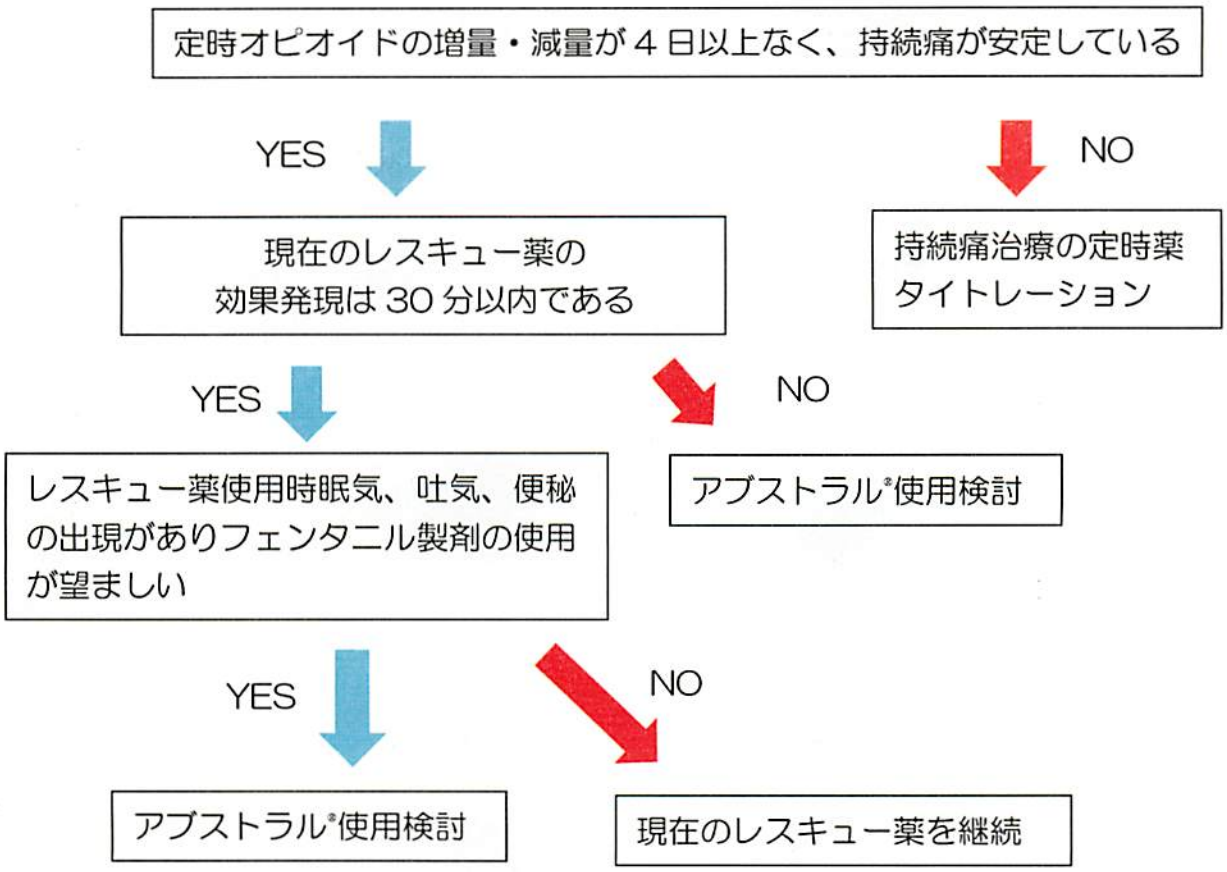
5、 与薬チェック表の使用方法、経過記録方法

6、 具体例（使用方法、実際の薬袋）

7、 Q&A

参考資料：アブストラル®添付文書

1、　突出痛治療の評価アルゴリズム



※その他のアブストラル®適応推奨例

□<u>内服が不安定</u>

例）脳転移、電解質異常、化学療法などによる悪心・嘔吐がある

□<u>消化管からの薬剤の吸収が不安定</u>

例）肝転移、がん性腹膜炎など器質的な通過障害がある

□<u>レスキュー薬の薬物動態と突出痛の時間経過が一致しない</u>

例）骨転移による体動時痛がある、予測不可能な発作痛がある

2、患者選択のためのチェックシート

使用にあたり、患者選択が重要となります。使用前、以下のチェックシートを用いて、患者選択が適切か、疼痛は安定しているかの確認を行ってください。

アブストラル®使用前チェックリスト

痛みの評価（全てチェックされていることを確認）
□疼痛アセスメント表を使用し、アセスメント行っている
□レスキュー使用は１日１～３回程度である
□定時オピオイドは開始したばかりではない
□定時オピオイドの増量が４日間なく安定している

適応患者の選択
以下の項目からアブストラル®選択理由を選んでください（　　）

1、　患者の突出痛は予測できない
2、　患者の突出痛は痛みの誘因があるが予測できない
3、　体動時などの予防投与に必要
4、　突出痛の出現が早い
5、　便秘を避けるために必要
6、　眠気を避けるために必要
7、　吐き気を避けるために必要
8、　腎機能障害がある
9、　舌下での投与経路が必要
10、その他（　　）

適正使用のための確認
□使用方法が理解可能　または　使用を補助できる人がいる
□患者日誌をつける事が可能である
□□腔内環境の確認
　・高度な口内乾燥、口腔粘膜炎、口腔内出血はない
□舌下投与を確実に行う事が出来る
（アブストラル®を舐めたり、かんだり、吐きだしたりする可能性が低い
併用注意薬剤（血中濃度上昇に関与）
□CYP3A4 で代謝される薬剤の併用はない（添付文書参照）

アブストラル®使用中チェックリスト

副作用

□呼吸回数 10 回/分以上確保できている

□強い眠気が出ていない

痛みの評価

□使用後、疼痛は除去されている

□アブストラル®の使用回数は頻回ではないか？（1 日 5 回以上の使用）

3、当院のルール

アブストラル®の使用は、添付文書の注意事項に加え、以下（1）～（5）の項目を参考にすることを推奨する。

（1）弱オピオイド定期投与時

コデインリン酸塩やトラマドール（トラマール®、トラムセット®）定期投与時のレスキュー薬としては原則不可とする。

（2）1回処方量

入院時の1回処方量は原則20回分まで（GWや連休は除く）
また、導入は原則入院（2014/09現在）。

（3）1回用量と追加投与量

1回用量は表1のように1規格を複数個使用（100μg以外）。

追加投与量（30分以降2時間未満での追加投与量）は
1回100～300μgまでは100μg、
1回量400、600μgは200μgとする。

表1　1回用量の組み合わせ、追加投与量

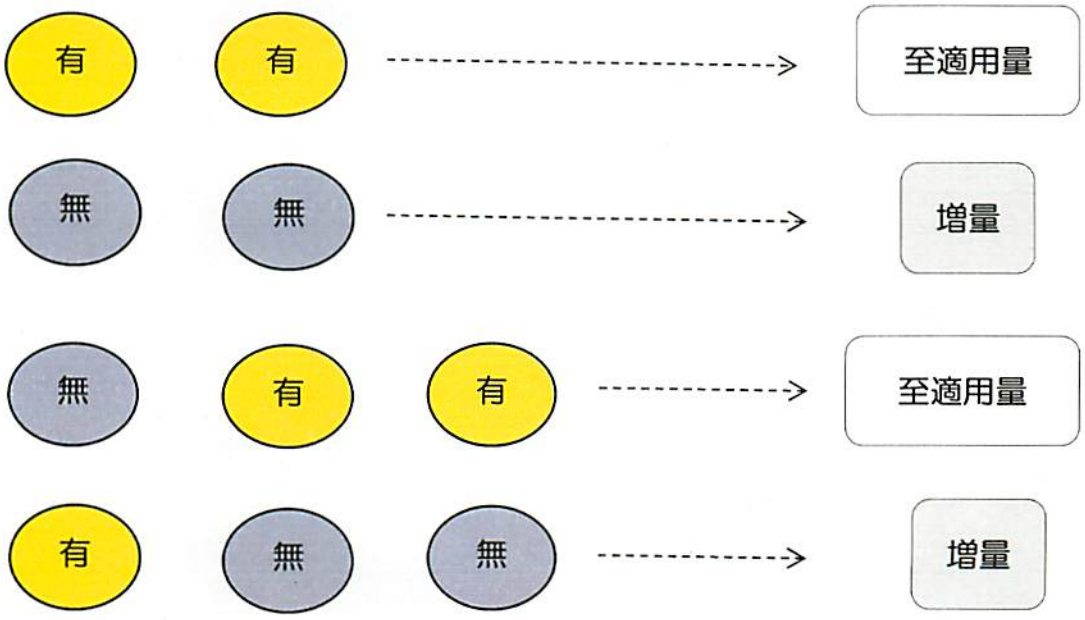
用量（μg）	1回錠数	追加投与量
100	100×1	100
200	100×2	100
300	100×3	100
400	200×2	200
600	200×3	200
800	400×2	－

（4） 増量の判断方法

一度のレスキューの効果で用量を決定せずに、2 回連続有効を目安として用量を検討すること。また、効果不十分な場合は使用方法の再確認も行うこと（飲み込んでしまったなど）。

1 回使用後 30 分以降に追加投与があり、また、他のオピオイドを使用した場合は増量を検討、または定時投与オピオイドの増量を検討する必要がある。

有効：1 回のレスキューで効果あり
無効：1 回のレスキューで効果なく、追加投与が必要であった



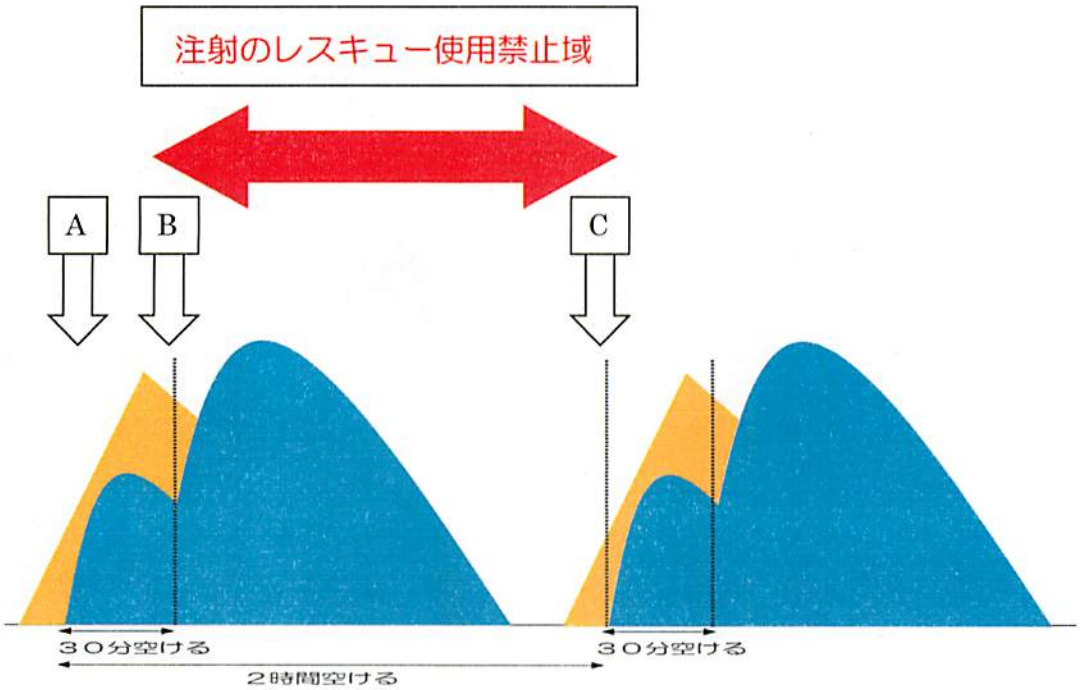
（5） 他のレスキュー薬投与の必要性

追加投与を行っても２時間未満に疼痛が起こる可能性がある。
その場合、オプソ®やオキノーム®を処方する必要がある。

しかし、注射剤との併用時は、副作用発現の可能性が考えられるため、
以下①②の場合は併用禁止とする。

他のレスキュー薬との併用禁止例

① １回使用後（A）、30 分以降にアブストラル®の使用があり（B）、さらに２時間未満の間（C）にレスキューが必要となった場合の注射剤の使用（赤の矢印の部分）は、血中濃度が急速に上昇する可能性があるため、この部分では注射剤の使用は禁止とする。



②オピオイドの持続静注、持続皮下注が行われている患者へのアブストラル®の投与は、アブストラル®使用の必要性を見直す必要がある。
（早送りが可能である状態なのに、舌下で鎮痛薬を投与する必要性は？）

4、処方・指示簿入力方法

（使用目的）

・指示を何度も同じことを入力する手間を省くため
・誰でも同じ指示を抜けることなく出せるようするため

例１）１回200μｇの処方の場合（統合セット内）

アブストラル®舌下錠　100μｇ　疼痛時　１回　２錠　舌下投与　20回分 ・１日４回までの使用とすること ・注意！追加投与量は100μｇ

例２）１回200μｇの指示簿記載内容　の場合

アブストラル®舌下錠　100μｇ　疼痛時　１回２錠　舌下投与 ・１日４回までの使用とすること ・１回使用後30分以降２時間未満に使用する場合は１回100μｇ追加 ・追加投与しても除痛不十分である場合は、他のレスキュー薬を使用

（入力手順）

電子カルテの指示簿
↓
簡易入力
↓
アブストラル®選択
↓
必要な用量のアブストラル®選択

※例１・２ともに100、200、300、400、600、800μｇの６通り作成
ただし、１回800μｇの処方・指示簿内容には追加投与の記載は削除。

5、与薬チェック表の使用方法、経過記録方法

（1）与薬チェック表の使用方法

例）アブストラル®　1回200μg（100μg　2錠）使用時

番号	日付	時刻	追加投与 使用時間	サイン
A	3/3	10：00		東
B				
C	3/3		10：30	東
D	3/3	13：00		西
E				

① アルファベット1つに対し、アブストラル®1錠を対応させる。
　この場合1回に100μg2錠使用するため、AとBを使用。
　日付・時刻・与薬者の名前記入

② 30分後に疼痛確認
　追加投与は投与後30分以降に痛みが残存する場合に投与可能。
　追加投与使用時間の項目に時間を記入。

③ 前回の投与から2時間以上間隔があいていることを確認し、疼痛出現時は
　① からまた繰り返す。

（2）記録方法（経過記録）

１日使用量、初回投与か追加投与の区別がつくように経過記録に記載

記録日時	#	区分	記号	内容	記載者
2014/03/03 10：00	1	S		腰が痛い、５位かな	○
		○	麻	端座位から立ち上がる際に痛みあり。1 回目アブストラル舌下錠 100μg2 錠ＡＢ舌下し、トイレまで歩行。	○
2014/03/03 10：30	1	○	麻	ベットに戻るが痛み持続しており、アブストラル舌下錠 100μg1 錠C追加投与する。眠気、吐き気なし。	○
2014/03/03 11：00	1	S		落ち着きました。１位	○
		○		アブストラル追加投与で効果あり	○

注意１アブストラル®使用後の疼痛アセスメント、特に 30 分以降の追加投与があるかないかの記載は、アブストラル®のタイトレーションにとても重要な情報です！必ず、投与後の疼痛の有無、副作用の有無の確認を行い、記載してください☆

アブストラル®使用中チェック項目

副作用

□呼吸回数 10 回/分以上確保できている

□強い眠気が出ていない

痛みの評価

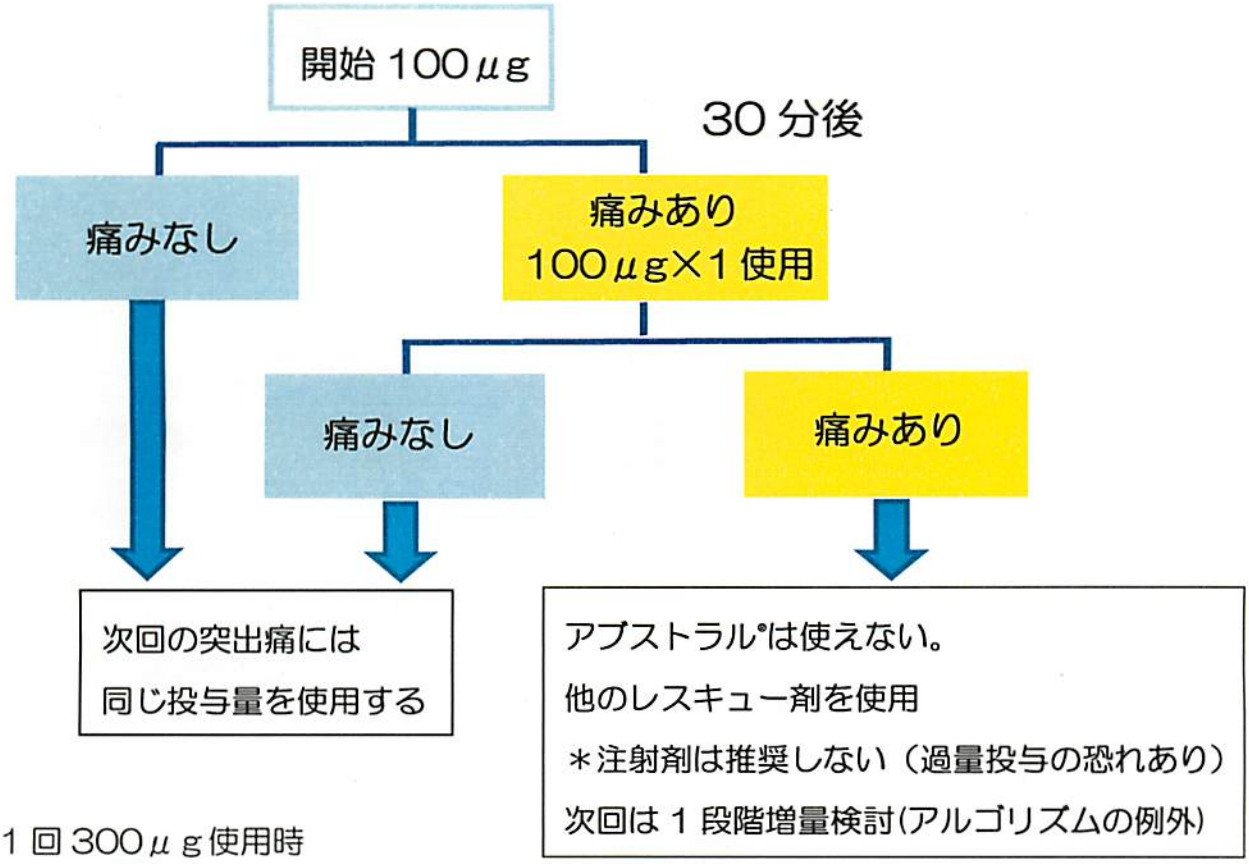
□使用後、疼痛は除去されている

□アブストラル®の使用回数は頻回ではないか？（1 日 5 回以上の使用）

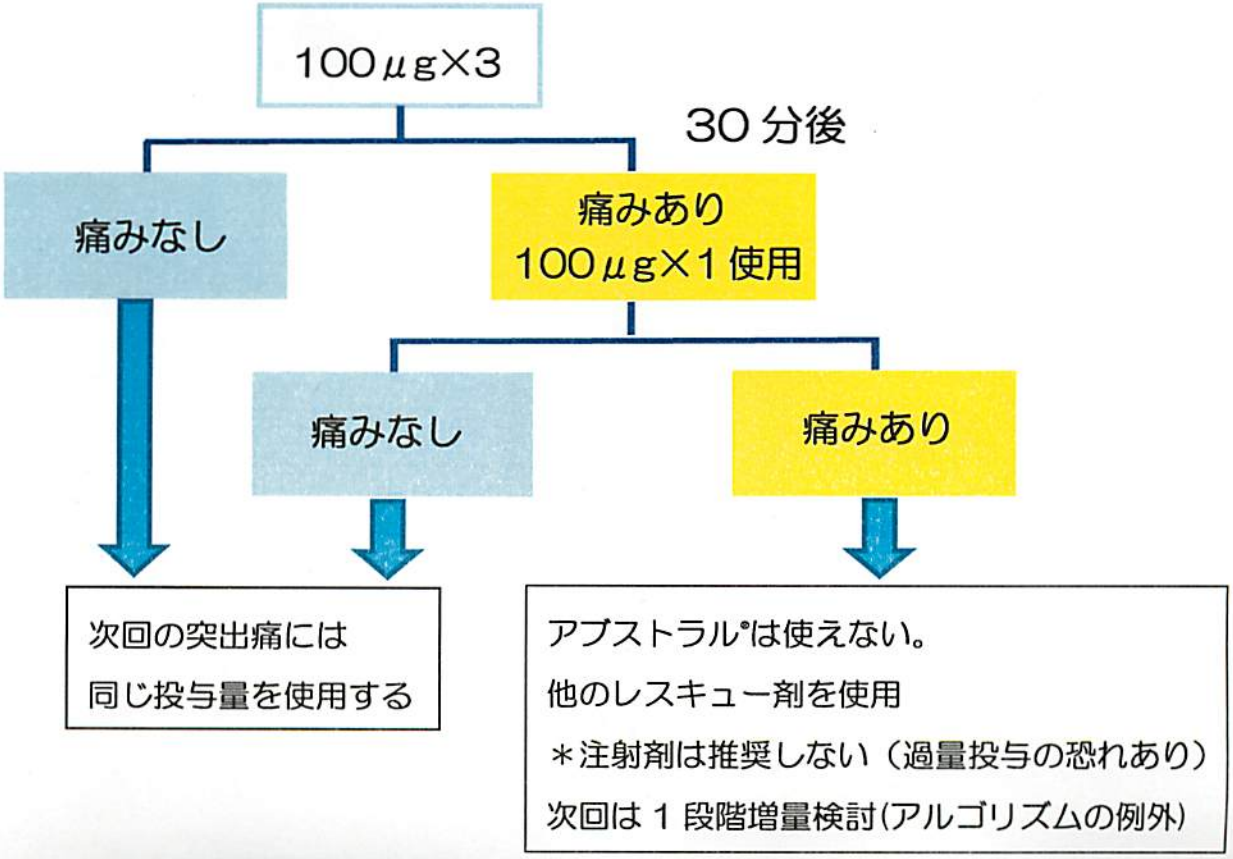
注意２アブストラル®は 1 日 4 回の製剤です。1 日を 6 時～6 時、または、0 時～0 時と個々のスタッフによって異なったため、1 日 5 回使用したケースがありました。カウント方法の確認も必要です。

6、　具体例

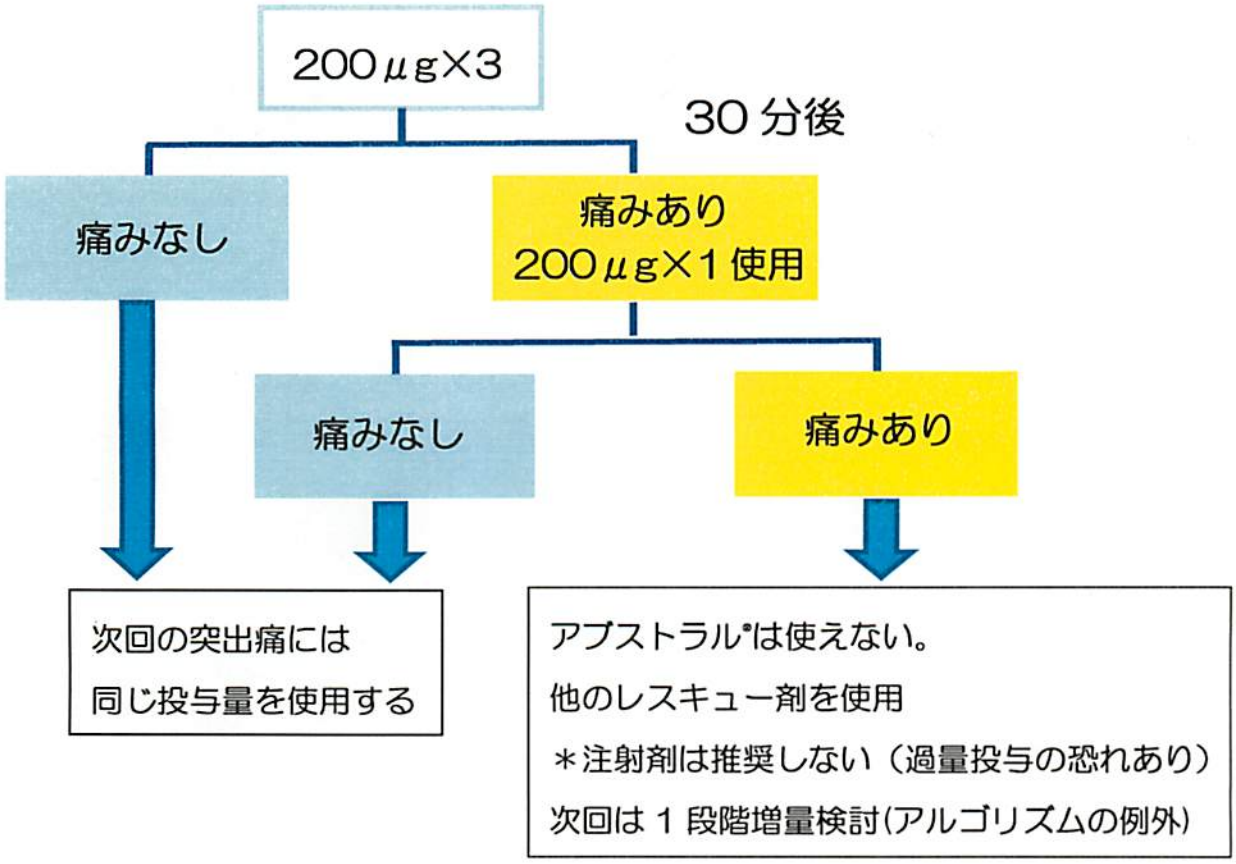
① 初回 100μg使用時



② 1 回 300μg使用時



③ 1回600μg使用時



④ 薬袋

とんぷく

(2/2)
入-臨時

テスト1病棟
内科
ID 99900004

ﾝﾃｽﾄ ｶﾝﾘ
テスト 緩和 様

２０回分

疼痛時に

麻

舌下してください

1日 4回まで
注意）追加投与は1回100μg

錠 剤 ： 1回 2錠（1種類）

飲んだり、かんだりせず舌下に入れて溶かして下さい
(麻)アブストラル舌下錠100μg

裏面を必ずお読み下さい

医療法人 東札幌病院
〒003-8585 札幌市白石区東札幌3条3丁目7番35号
TEL 011-812-2311

00017

薬剤師

・１日４回まで
・追加投与量の記載あり

⑤ 与薬チェック表

アブストラル舌下錠

（使用上の注意点）

（追加投与なし）

前回の投与から2時間以上の間隔をあけること。

（追加投与あり）

本剤投与30分以降に痛みが残存する場合は、追加投与量を1回のみ使用可。追加投与は突出痛に対する最初の投与から30分から2時間の間に行うこと。追加投与した場合も、次の突出痛に対する投与は初回の投与から2時間以上間隔をあけること。

番号	日付	時刻	追加投与使用時間	サイン
A				
B				
C				
D				
E				
F				
G				
H				
I				
J				
K				
L				
M				
N				
O				
P				
Q				
R				
S				
T				

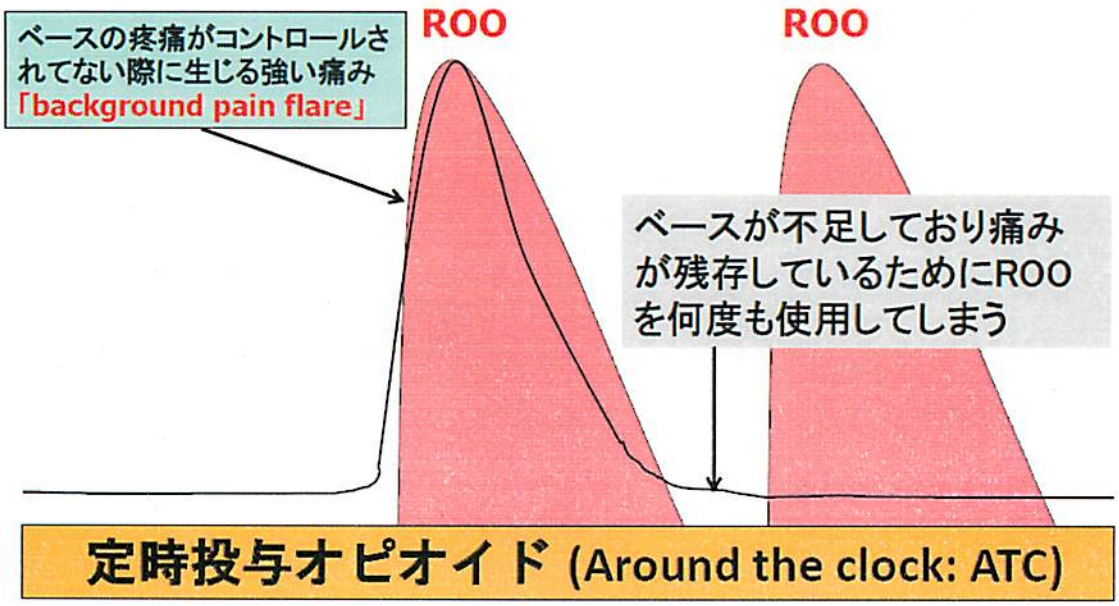
7、Q&A

Q1　アブストラル®の使用回数が増えてきました。

頻回な使用がある場合、以下のことが考えられるかもしれません。
使用間隔のチェックを行いましょう。
1、2ともに疼痛アセスメントの見直しが必要かもしれません。

1）アブストラル®の使用間隔が短くなってきた場合
① 病状の進行に伴う突出痛の悪化
② 病状の進行に伴う持続痛の悪化　　など

2）アブストラル®を定期投与している場合
決まった時間に定期的に内服しているような場合は、持続痛に使用している薬剤の不足の可能性があり、以下のような図のようなことが考えられます。



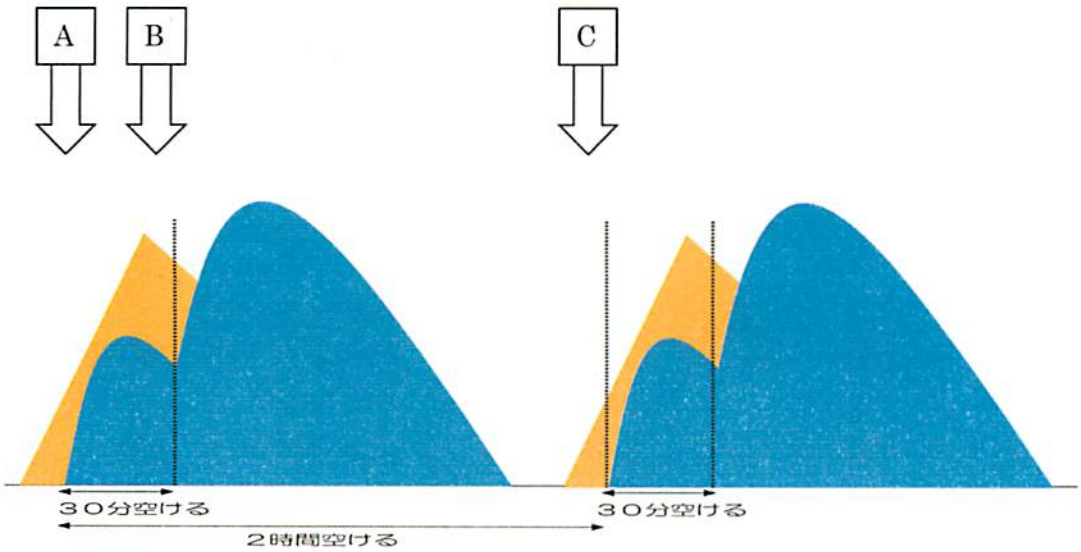
Q2　２時間未満の突出痛の対応

１回使用後、30 分以降に追加投与行っても更に痛みが除去できない場合は、他の速放性の経口オピオイドを使用してください。
また、１回使用量が不足している可能性もありますので、１回使用後 30 分以降に追加投与を行い、院内ルールにしたがって、アブストラル®の使用量もタイトレーションする必要性があるかもしれません。

フェンタニル製剤による疼痛除去が必要で、回数を気にせず使用したい場合は、アブストラル®から注射剤でのレスキュー投与への変更も検討が必要です。

（確認しましょう！）

- アブストラル®は１日使用量は１日４回まで 。
- １回の突出痛に、３０分以降１回まで追加投与が可能
  (B：Ａ投与から 30 分以上２時間未満)
- 投与間隔は追加投与を除き２時間以上空ける(C：Ａ投与から２時間後)
- B～C の間は他のオピオイドを使用すること！



Q3　転院してきた患者さんがアブストラル°を使用しています

他院で医療者、患者の混乱を避けるために、回数制限、また、追加投与の説明がなされていないことがありました。

他院から転院してきた場合は、

□どんな説明をされていたのか？その内容確認
□再度アブストラル°の使用方法の確認（追加投与できる旨）
□アブストラル°の必要性も確認（注射剤でもよいのではないか？）
□持続痛の悪化はないか？のアセスメントの必要性

上記項目の確認を必ず行ってください。

また、院内はアブストラル°の１回使用量にルールがありますので、持ち込んできた薬剤と異なる規格の使用がないよう確認が必要です。

Q4　予防投与に使用してもよいですか？

今までのように、オプソ°、オキノーム°を予防投与に使用することは可能です。また、アブストラル°も予防投与に使用可能です。しかし、アブストラル°は１日４回までという使用回数に制限がありますが、予防投与に使用する際は、約 15 分前の使用で十分かと思います。

Q5　舌下にアブストラル°が白く残っていますが大丈夫ですか？

がん患者さんは口腔内が乾燥していることがあります。
薬剤は溶解するとフェンタニルが粘膜に吸着され吸収されています。
固形のまま残っていなければ大丈夫であると思われますが、薬剤の効果が出ているかの確認を行ってください。乾燥が見られる場合は、毎日口腔ケアを行ってください。

Q6　舌下して何分でとけますか？

２分以内には溶解されます。

Q7　どれくらいで効果発現しますか？

約 10 分で効果発現します。
効果が不十分なときは、30 分後以降に追加投与を行ってください。
ただし、使用方法が正しいか、副作用は発現していないかの確認をおこなってください。

フェンタニル製剤は鎮痛と呼吸抑制の幅が、他のオピオイドよりも狭い薬剤です。血中濃度の立ち上がりが早いので、痛みのアセスメントに加えて眠気の有無、呼吸状態の確認を必ず行ってください。

Q8　アブストラル®の使用回数が４回までなのはなぜ？

欧州癌治療学会のガイドラインにおいて、突出痛の回数が増加し、１ 日当たりの突出痛が ４ 回を超える場合には、持続性疼痛治療薬の増量を行うことが適切である旨が記載されています。患者さんには１日４回以上の使用は、定時投与薬増量の目安となることの指導が必要です。

2014年3月10日

改定2014年9月　1日

編集　薬剤課　和泉　早智子